識別番号　　Ｐ１　　2005 年度完了学内共同研究

研究課題　　日本の文化受容における言語・思想・学問・宗教

研究代表者　松岡洸司（文学部国文学科　教授）

共同研究者　水谷由宏（理工学部物理学科　講師）、服部隆（文学部国文学科　助教授）、島健（文学部保健体育研究室　助教授）、片山はるひ（文学部人間学研究室　助教授）、鰍澤千鶴（文学部非常勤講師・清泉女子大学非常勤講師、）、大橋敦夫（文学部非常勤講師・上田女子短期大学　教授）、相ヶ瀬千草（オブザーバー・2005 年度文学部非常勤講師）、天野かおり（オブザーバー・2005 年度上智短期大学非常勤講師）

Summary

Acculturation can be defined as a phenomenon that continuous cross-cultural contact causes a change of the cultural system of one side or both sides. In the present situation where the importance of globalization is increasingly stressed, it is time to reconsider how Japanese culture contacted overseas cultures in the past. About the cultural contact in Japan, particularly with Western cultures, there are three turning points: 1.*Kirishitan* period (16th century), 2.Edo period, 3.*Bakumatsu* to Meiji period

We conducted a case study of the acculturation such as languages, thoughts, sciences and religions in three periods.

◆研究目的・背景

「文化受容」とは、異文化どうしが持続可能な接触を行い、その片方あるいは両方がもつ文化体系に変化が生じる現象と定義できる。国際化が叫ばれる中、まずは過去に日本と海外の文化がどのように接したかを、改めて振り返るべき時期に来ている

日本における海外の、特に欧米の文化受容は次の 3 期に分けて考えることができる。

①16 世紀　キリシタン時代②江戸時代③幕末から明治時代

この 3 期における文化受容の歴史（特に、言語・思想・学術・宗教）とその特色について、ケーススタディーをおこなった。

◆研究項目・概要　（全 9 名による）

１、16 世紀キリシタン時代における文化受容

ルイス・フロイスの日本観「船・劇・紙」（松岡　洸司）

イエズス会司祭であるルイス・フロイス(1532－97)は、1562 年に来日、1585 年に『ヨーロッパ文化と日本文化』をまとめる。この書において、彼はヨーロッパ・日本文化の差異を認識しつつ両者の対照･把握をおこなった。

今回はその全 14 章のうち、「船とその慣習・道具。」(第 12 章)、「日本の劇・喜劇・舞踏・歌・楽器。」(第 13 章)、「日本人の書法・書物・紙。インク。」(第 10 章)について取り上げ、

彼の日本観を考察した。
「南蛮船」に出会った当時の日本船と自国船を比較対照し、演劇の形態差にふれ、また紙の種類から書状の形式差にいたるまで言及したこの書は、当時の状況や文化把握がいかなるものであったかを伝える、貴重な資料である。

『礼法指針』にみるエチケットの文化受容（鰍澤　千鶴）

イエズス会の東洋地域巡察師（事実上の東洋部門総会長代理）アレサンドロ・ヴァリニャーノは 1579 年に来日。外国人宣教師に対し、日本語習得とともに風土･文化・習慣などへの深い理解を勧めた。その具体的な規則が 1581 年『礼法指針』である。今回はこの書を、礼儀(エチケット)の文化受容の観点から、日本･西欧の礼法書をもとに考察した。なお当時のヨーロッパは、「礼儀作法」が一般庶民に開放されていった時期でもある。

内容としては、「神父に大切な、品位を保つふるまい」、「挨拶」、「盃と肴の作法」、「敬意を払うべき客人を迎える方法と宴会･贈り物のマナー」などを扱い、わかりやすいように対照・分類という手法が用いられた。
「礼儀」は「文化」につながるという意味において、この書は「文化差」の存在を認識していたからこそ記された「文化受容」である。

『サントスのご作業』の仏教用語　（相ヶ瀬　千草）

『サントスのご作業』とは、キリスト教の歴史に名を残し信仰の手本となる「聖人」たちの伝記である。難解な教義の本質を伝える手段として、具体的な生涯伝は布教の際に重要な役割を果たした。教義は布教国の言語に翻訳する必要があるが、それには一方で在来宗教との混同という問題も生じる。そこで当時、宗教用語には原語主義が取られたが、それでもなお理解への配慮か、キリシタン資料における仏教用語の占める割合は大きかった。
今回は 1591 年写本を底本とする資料を用い、仏教用語の用法･傾向を次のとおり確認した。
①キリスト教用語の翻訳不適切な仏教用語（「仏」など）は、ローマ神話など異教の用語に適用。
②複数の翻訳語がある場合、認知度の高いものを使用（「悪魔」の訳語として「天狗」）。
③キリスト教･異教とも使用可能な仏教用語は、個々の仏教色をそれぞれに置き換える（出家→「キリスト教の修行者」）。

２、江戸時代における文化受容

酒食の「もてなし」語彙考　―対訳辞典の採用史を中心に―　（天野　かおり）

酒食のもてなし・宴は個人･団体にかかわらず、その関係の始まりや向上において重要な役割を果たしてきた。これは、対外交流史上も同様である。
今回は口語性を重視したというキリシタン資料、そして江戸後期から明治期の欧米対訳辞書を用い、酒食への招待を中心に指す語彙の採用状況を確認した。
① キリシタン資料（1590～1614 年）では、語学書（例『日葡辞書』）は「もてなし」、その他（教義書・文学書）は「ふるまい」が最多である。また「馳走」･「奔走」を、ともに同義で使用していた状況が把握されている。
② なお室町末期の姿を留める狂言台本『虎明本』では「ふるまい」が多い。

③ 洋学期の蘭和・英和対訳辞書（今回参照：1798～1869 年）では「饗応」が最多である。この語自体は古くから『徒然草』などでも使用され、江戸期の朝鮮通信使への公的接待資料でもその名称に見られる。キリシタン資料では、口語性が低いとの判断か、不採用であった。

江戸後期における西洋科学の受容の一考察
—2、3 の科学用語の翻訳を中心として—　（水谷　由宏）

西洋科学が体系的に日本へ伝わり始めたのは、江戸後期である。その受容過程について、2、3 の科学用語例とともに考察した。

江戸後期、西洋科学を真っ先に受容したのは医学分野であり、蘭方医学の興隆をもたらした。鎖国後はオランダ人と交流した長崎通詞の中から翻訳者・窮理学（物理学）者が登場。その後、英・仏・独に主力が移行するも、成熟するのは明治期も一段落してからである。開国後の科学技術は、殖産興業策のためのものであった。

また専門用語の上手な翻訳・定着はその分野の受容に必須であるが、科学用語の日本語化において、

①江戸期は中国語・漢籍の影響が色濃く、中国語による適切な意訳があるかどうかが出発点（例：「方程式」「関数（函数）」）。

②「物理学」が定着、用語統一の必要性が出てきた明治期、主要な日本の物理書が日本語で記述されるようになり、創意による用語数も飛躍的に増加した（例：日本初の物理書、志筑忠雄『暦象新書』1798）。

山田維則『蘭学辨』を読む　—江戸期蘭学の受容と反発—　（大橋　敦夫）

江戸後期の儒者・山田維則（1775～1861）は上田藩校の第 2 代惣司（校長）であり、彼が記した「排蘭書」ともいうべき書が『蘭学辨』である。これまで上田藩領内にないと思われていたその写本が、上田市内在住の室賀氏宅（幕末～明治初期、寺子屋を開設）に存在した。資料所在地・所蔵者からも、当時の蘭学受容の状況が浮かび上がってくる。

今回は『蘭学辨』の蘭学・砲術観から、江戸期蘭学の受容と反発を検討した。全体の内容は以下の通り確認できる。

①蘭学が医学（解躰）から軍事科学（炮術）に傾斜しつつある当時の状況に対し、武士道観に反する「炮術」の残虐性を問題視。

②本来、武器は威嚇・畏怖させるためのものであり、また為政者は武力（炮術）統治ではなく「士気ヲ養フ」ことが重要と説く。

③蘭学流行の中、砲術に頼りきって士気が衰えることを危ぶみ、亡国の憂えを提示している。

３、幕末から明治における文化受容

江戸後期・明治前期の日本語文法研究における国学と洋学の交渉　（服部　隆）

明治初期における日本語文法研究は、蘭･英文典の組織から大きな影響を受けた。同時に、江戸期以来の伝統的な国語研究も適宜取り入れ、「和洋折衷」の模索状況でもあった。

今回は、江戸期そのままの姿ではなく、すでに西洋的要素を取り込んだ「伝統的な日本語文法研究」が明治期に果たした役割について検討した。

① 鶴峯戊申(天明 8～安政 6 年)は、品詞分類において蘭文典の枠組みをほぼ踏襲し、そこに日本語を当てはめていく態度をとった。
② 黒川真頼（文政 12～明治 39 年）は、国学的な「体・用・辞」が分化あるいは派生したものが西洋的な品詞であるとした。
③ 物集高見（弘化 4～昭和 3 年）は、国学的な語分類と西洋的な品詞分類は、「形態」と「性質」という異なる観点から分類したものであるとした。
④なお、William George Aston（1841～1911 年）は日本語研究において、自立性と活用の有無で語類の分類をおこなう等、国学系の国語研究に影響を受けている。

明治時代の文化受容におけるスポーツへの影響
―スポーツと学校体育との関係を中心に―　（島　健）

身体運動やスポーツに関する分野でも、明治期の日本は西洋から大きな影響を受け、近代スポーツもこの頃導入された。今回はその普及に中心的役割を果たした学校体育の変遷とともに、当時のスポーツへの影響を概観した。
①この時期より、体育が学校教育の中で教えられるようになった。西欧の教育思想として「身体の教育」と理解された体育だが、その教科の中心に「体操」が選ばれてしまった。
②政府は「体育学教員」の養成に乗り出すが、富国強兵策の影響で兵式体操などの「体操指導者」養成となる。そのため遊戯やそこに含まれるスポーツは、教育効果を理解されず脇役に甘んじた。
③男性の運動服は西洋化が進むが、女性は服だけでなく積極的参加も、その社会的解放の時代まで待つこととなる。
④競技としてのスポーツが、高等教育機関を中心に広まっていった。
⑤柔道などの武術は一時期、衰退の状況にあったが、スポーツ性を高めたことで教育的価値が認められ、復興していく。

遠藤周作の文学における日本のキリスト教受容について　（片山　はるひ）

遠藤周作『沈黙』は 1964～1966 年に執筆され、1966 年 3 月新潮社より刊行された。今回は後半部分の有名な議論に焦点をあて、小説と歴史の両面を出発点に、日本のキリスト教受容の問題点を検討した。
①歴史に題材をとったこの小説の重層性を考慮すると、「泥沼」というキーワードについては、ネガティブなだけでなく変容の可能性を含むイマージュとも捉えられる。
②遠藤は、「裁き」の神ではなく「愛」の神というイメージを広めて、キリスト教を一般の日本人に身近な存在とした。その貢献の源泉は、間接的にせよ聖テレーズの霊性の影響がある。
③遠藤が投げかけた問題は、日本に限定されない普遍的なものであり、キリスト教受容に関する根本的な示唆として読み直すことができる。そして聖テレーズの霊性と、「潜伏キリシタン」の精神を支えた教理書『こんちりさんのりやく』の霊性との共鳴は、この小説の根底を支えている。